

1. 序論

「神の子イエス・キリストの福音の初め。」(マコ1:1)

「この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」(ヘブ1:2)

「そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」(使10:42f)

旧約聖書が新約聖書と共に・・・、両者がしっかりと結びついて一つの“教会の聖書”であることを、先ず明確にしなければなりません。なぜなら、このことを前提にしないでは、私たちは聖書が語る神のことは(福音)を正しく理解することが出来ないからです。

教会では普通あまり深く考えないで、聖書は“神のことは”であるという言い方がしばしば使われていますが、私たちが実際にこれを読んでみると、それはむしろより正確には“歴史の中での神の行為、およびその解釈”の書であることが分かります。そしてそこでは過去から将来に至る全歴史が、イスラエルという特別な民を中心に描かれています。

聖書の中では実際“神のことは”という用語が多く使われていますが、それは決して歴史の中での“神の行為”から切り離しては理解出来ないものなのです。なぜなら、聖書が述べている“神のことは”は、天地創造から終末の神の国到来に至る救済史(神の救いの御業の歴史)とは無関係な、独立した抽象的な真理のようなものではないからです。

このように聖書は、神の救済の歴史をその民の信仰の告白という形で語っている文書であり、旧約のイスラエルにとっても新約の教会にとっても、その民の礼拝の中心主題はいつも、この救済史の叙述(つまり説教や信仰宣言、あるいは別の表現では記念)でありました。ですから私たち信者が聖書を学ぶということは、ある特定の歴史(救済史)を通して神が行われた救いの業を、信仰と愛と感謝をもってたどることに他なりません。私たちにとって、歴史こそが神の啓示の主要な舞台だからです。

新約の民である教会にとって、イエス・キリストは啓示の完成者であります(神の啓示に関する教義憲章4)。しかし実際には、各小教区における司教や司祭の説教の実態は、“神はキリストを通してその贖いの御業を行われた”(IIコリ5:18-21)という宣教にはなっておらず、また使徒信条やニケア・コンスタンチノープル信条に述べられているような救済史の宣言でもない・・・ということに、注意を喚起しなければなりません。同様にミサの後半の感謝の典礼も、キリストの死と復活の記念、またその贖いの御業の秘跡的再現(総則前文2)として、必ずしも司祭にも信者会衆にも正しく認識されてはいないのです。

2. 19世紀の名残／教導職と信徒のキリスト教理解

20世紀の前半に牧師や司祭となった人々、したがって前世紀の第三四半期頃まで実際に礼拝やミサで説教し、信者の教育に責任を持っていた現場の指導者たちの“キリスト教理解”は、ほとんどすべて19世紀の名残から脱することが出来ないままでありました。そして残念なことに、彼らの跡を継いだその後の指導者たちのほとんども、(恐らく彼らの育ちの影響で)その神学教育の過程で“聖書神学”を軽視する傾向が根強くあって、このような時代遅れの“キリスト教理解”から一歩も出ることが出来ずにいるのが現状なのです。神の啓示に関する教義憲章(24)は、神学にとっての聖書の重要性を述べて、「それゆえ、聖書の研究は神学の魂のようなものであるはずである」と言っています。この憲章の主旨を21世紀の教会に具体的に実らせることは、すべてのキリスト信者に期待されている課題であると理解しましょう。

19世紀の聖書解釈において最も重視されたのは、価値の出現という考え方でありました。聖書を研究するということは、歴史の各段階ごとに新しい価値が登場して来るような、歴史の成長と進歩の過程を知ることであると考えられたのです。聖書の中で最も古いと思われる資料は最も原始的であり、後の時代のものになるに従って進歩して来ると推定されました。そのような価値判断によって原始的なものや進歩したものを見定めていくことが、聖書研究というものだと理解されました。

しかし、この価値判断そのものは単なる常識の範囲を出るものではありませんでした。その説明として使われる根拠は、“キリストの御心”などというあいまいなものに過ぎず、実際には世俗的理想主義などから引き出されて来るようなものであって、決して聖書そのものから出て来た判断ではありませんでした。

このような解釈のもとでは当然旧約聖書は、単にキリストの福音が出現するに至ったその進歩の背景を提供する古代の文書にしか過ぎません。今や福音がキリスト教の教理として体系づけられ、教会によって全世界に宣教されている時代には、価値と理想が最も純粋に啓示されている“進歩した段階”だけを学べばよいというのです。

聖書というものを、ただ価値ある教えを学ぶためのものと考え、同時に他の諸宗教をも研究するようになると、当然そこには類似の霊的・倫理的な教えが多くあることが分かって来て、すべての宗教は根源において同じであるという理解が生まれます。ただキリスト教は、他宗教よりも“より優れた教えと価値”を所有しているというわけです。

このようにして20世紀の、いわゆる海外伝道に携わる宣教師たちはその使命を、“より優れたキリスト教”を広めることと理解し、その結果無意識のうちに、未開な民族に対して西欧文明の優越性をもって資することと考えるようになりました。そして彼らによって建てられたミッションスクールは、“より優れた価値”を教えることがすなわち福音宣教に相当するのだと考えて、西欧の先進的な学芸と教養を伝えるだけの(信仰ではない!)学校になったのです。

教会の指導層も一般信者も共に、“聖書の福音”と“より優れた価値”というものとの間に、明確な境界線を引くことが出来なくなってしまいました。

3. 聖書神学の世界

20世紀のいわゆる“海外伝道”によって宣教師たちがもたらした“より優れた価値”としてのキリスト教の宣教、すなわち未開な後進国の人々のために西欧文明の優越性をもって資するという理解の名残は、今もヨーロッパのキリスト教で、特に保守派の人々の主張として悔りがたく生きています。曰く“ヨーロッパが自由民主主義を有効に運営するためには、キリスト教的基盤が是非とも必要である”、曰く“キリスト教こそ理性の暴走からヨーロッパを守る防波堤であり、際限のない個人中心主義、快樂主義、科学万能主義に対して、教会は毅然と立ち向かわねばならない”、というわけです。

ところで、聖書神学の世界に立ち戻って見ると、そこでは信仰の対象は聖書によって伝えられて来ている救済史の“秘められた計画”(ロマ 16:25、1コリ 2:1、エフェ 1:9、3:3-6 他)であることが分かります。すなわち神はその宇宙的救済計画の器として、一つの民(アブラハムとその子孫)をお選びになりました(創 12:3)。そして“神のことは”は、この神の救済史を通して今も教会に語られている“生きた現在のことは”なのです(ロマ 4:13-25、ガラ 3:29)。私たちの救い主イエス・キリストは、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(黙 1:8)であり、「わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、“霊”により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです」(ガラ 5:5)。

アブラハムへの約束は、旧約聖書に伝えられている遠い過ぎ去った昔話ではなくて、人類の現在に関わる救済史の出発点であり、それが神の子イエス・キリストの到来によっていよいよ完成に近づいたと、使徒たちは宣教しました(ガラ 3:15-29)。ルカ福音書のシメオンの歌は、この初代教会の信仰を高らかに歌い上げています(2:30-32)。

ルカ福音書 1 章はこの神の子イエスの誕生を、ひたすら神の救済史の実現として描くことに集中しています。すなわち洗礼者ヨハネの誕生を予告する vv.5-25 も、マリアへの受胎告知を含む vv.26-45 も、それらの物語りの主人公は救済史を導かれる神であります。マリアの賛歌の中の vv.54-55 も、ザカリアの預言の中の vv.68-70 も、この救済史の約束の実現が主題です。

v.69 に言及されているように、神の救済史の実現はダビデ王家を経由して進められて来ました(イザ 9:5f、11:1-10 参照)。マタイ福音書が「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」から書き始め、1:23 でイザ 7:14 を引用しているのも同じ理由です。使徒たちの宣教した福音は、「肉によればダビデの子孫から生まれ」(ロマ 1:3)たイエス・キリストの福音でありました。

もちろんすべてのカトリック信者にとって、ミサ典礼は神の現存を秘跡的に体験する集会祭儀であります。しかし聖書が強調しているのは、救済史における具体的な出来事を通しての神の啓示であって、ただの主観的あるいは神秘的・霊的な、人間の感情や体験ではありません。聖書において信仰とは、神の歴史的啓示に基づくという客観的な要素を持つものであって、人間の主観的体験だけで説明することの出来ないものです。

「イエス・キリストは主である」という教会の信仰(1コリ 1:2、フィリ 2:11)は、父なる神が私たちと全世界の罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになった(1ヨハ 2:2、4:9f)という、聖書が証言する救済史における客観的な神の御業から、決して切り離すことが出来ないからです。

4. 救済史的解釈

現代カトリック教会の典礼書・儀式書には、原始教会に起源する聖書の救済史的解釈が、その基本構造の中に組み込まれています。私たちが毎主日にささげるミサ典礼では、ことばの典礼は伝統的な信仰宣言で締めくくられ、一同は「主は、生者と死者を裁くために、栄光のうちに再び来られます。その国は終わることがありません。…… 罪の赦しをもたらす唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望みます」と唱えます。感謝の典礼では特に記念唱で「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで」と唱和します。そして交わりの儀の冒頭で、一同は主の祈りを唱えますが、これは「み国が来ますように」という祈りです。なぜならこの交わりの儀は、復活して将来の神の国における典礼にあずかる、白い衣を着た大群衆の交わり(黙 7:9-17)の先取りだからです(典礼憲章 8)。

カトリック儀式書「葬儀」では、その緒言で、「教会は葬儀において、何よりも復活信仰を表明し、キリストによって死者を神のみ手に委ねる。…… キリストの再臨と死者の復活を待ち望むよう祈る…… と同時に、洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれることができる、という信仰を新たにし、宣言する場でもある」と述べています。

聖書を救済史的に解釈するとは、これをキリストを中心とする神の人類救済の“記録” また“証言”として読むということであって、旧約の歴史もキリストに至る救いの歴史の一部としてその中に含まれます(II コリ 1:20、ロマ 8:23ff、ヘブ 11:1f 参照)。

O.クルマンはその著「キリストと時」で、救済史的解釈について次のように述べています。「我々の用いているキリスト起源は、ある起点からではなく、一つの中心から出発するのである。…… その決定的な点というのは…… キリストの生誕を中心として、同時に前方(キリスト紀元前/BC)および後方(キリスト紀元/AD)に数えてゆく仕方である。それは、こうして初めて、キリストの来臨の事実が、すべての出来事の中心とみなされるからである。…… そしてこの歴史は、啓示および救済史と呼ばれるのである。」

ちなみに近年は、学術的文献等において、宗教的色合いを避けるために CE(一般通俗の時代)/ BCE(それ以前)が用いられる傾向が強くなりました。実質的には AD/BC と同じ内容です。

聖書そのものが元来持っており、明らかに原始教会の宣教もそれを土台にしていたはずの救済史への信仰が、歴史の教会においてはかなり早い時期から軽視されるようになり、通俗的キリスト教理解がひどく現世的なものに変質してしまったことへの反省として、再び神学者たちの間で聖書の救済史的解釈が真剣に論じられるようになったのは、ほぼ 20 世紀に入ってからのことなのです。残念なことにかトリックでもプロテスタントでも、現場の説教者たち(司教や司祭、牧師たち)のほとんどは聖書の、したがって使徒的宣教の救済史的解釈には無知・無理解なのが現代世界の実態であって、説教を聞く会衆も彼らの説教と信条や主の祈りととの間の不一致に気付くことがありません。

旧約聖書の著者たちの関心は、歴史の創造者である神、その歴史を通して御自身を啓示され、御自身の約束された宇宙的救済計画を今も確実に進めておられる神に向けられていました。ですから神の約束とその実現の希望こそが旧約聖書の中心主題であって、イスラエルの信仰は歴史のすべてをこの光の中で解釈することに集中しています。それに比べて旧約聖書と同時代の古代の諸宗教は、みなそれを生み出した文明の滅亡と共に、それぞれ歴史の舞台から消え去って行きました

マタ 4:17 「悔い改めよ。天の国は近づいた。」

マコ 1:15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

神の子イエス・キリストの福音を、その特別な救済史的背景すなわち「神の国は近づいた」ということから切り離して読んでしまうと、最早それは使徒たちが宣教したような意味では理解出来なくなってしまいます。なぜなら新約聖書が語っている福音は、キリスト紀元前の歴史も、教会の誕生以来の歴史も、救済史である(コロ 1:15-18)という信仰を前提にしているからです。ですから私たちは、このような救済史を導かれる神を旧・新約聖書を通して知り、福音と信仰を正しく理解しなければなりません。「信仰による従順」(ロマ 1:5)とは、このような救済史を導かれる神への従順であることに、現代のキリスト信者の目が開かれねばならないのです(カテキズム 143)。

5. 嫉む神

出エジプト記 (新共同訳)

20:1 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」

20:2 「あなたには、わたしをおいてほかに、神があってはならない。」

20:5-6 「……わたしは主、あなたの神。わたしは情熱の神*である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及び慈しみを与える。」

* 妬みの神(フランシスコ会訳)、ねたむ神(口語訳)、嫉む神(文語訳)

通俗的には、聖書が語るこの“神の妬み”という概念が、キリスト教的ではない、むしろ好ましくないものであるかのように、近代の一般信者たちの間では考えられて来たようです。

しかし旧約聖書は、神がイスラエルの民に対してそのように御自分を啓示されたという理解を証言しており、その典型例が十戒(出 20:5,34:14、申 5:9)その他(申 4:24,6:15、ヨシュ 24:19、エゼ 5:13 等)に登場しているのです。

① 何よりも先ず神は御自分を他の神々から明確に区別して、御自分だけがイスラエルの神であり、他のより低いレベルの神々と御自分を彼らが同列に扱うことを禁じておられるのです。

② 周辺諸国民の宗教(古代においても近代においても)は、人間の生活と社会のあり方を自然の世界を支配する神々のリズムに合わせることを主眼としているのに対して、イスラエルの信仰は天地の主である唯一の神の御意志に服従するという、人格的でより深い内容を問題にしていました。

③ イスラエルの神は、一方では御自分の愛と恵みによる大いなる御業によって、他方では御自分の戒めと定めを伴う契約によって、この民を御自分のものとされました。この二つの要素(救いの出来事と服従の要求)の故に、排他的に、神はその民に御自分への全き“愛と信仰と信頼”を要求しておられるのです。

従ってそこでは“罪”とは、他宗教におけるような単なる“障り(崇りを引き起こすようなもの)”ではなくて、この民を選ばれたイスラエルの神との関係を損なうこと、神を唯一の主とせず、神の愛に背いて歩む不信仰のことです。それに対する解決は、民がへりくだって悔い改めることと、神が大いなる赦しを与えてくださることによってだけ得られるのです。

「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」(申 6:4-5)

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マコ 1:15)

神の“怒り”と“裁き”とは、この神への不信仰と反逆への報いとして、聖書が語っているものです。

「イスラエルとユダの家は繰り返してわたしを欺いた、と主は言われる。彼らは主を拒んで言う。“主は何もなさらない。我々に災いが臨むはすがない。剣も飢饉も起こりはしない。預言者の言葉はむなしくなる。『このようなことが起こる』と言っても実現はしない。”それゆえ、万軍の主なる神はこう言われる。“彼らがこのような言葉を口にするからには見よ、わたしはわたしの言葉をあなた(エレミヤ)の口に授ける。それは火となりこの民を薪とし、それを焼き尽くす。”」(エゼ 5:11-14)

現代のキリスト者の多くは、旧約聖書が述べている神のこのような“怒り”や“裁き”というものを、ほとんど理解していません。そして旧約聖書を脇に置いて、新約聖書だけを勝手に気に入るように解釈しているのです。その一例として、“神は霊である”という表現を挙げることが出来ます。神を霊的に理解するということによって、具体的に聖書に証言されている救済史の神ではなくて、人間が精神的に心の中で感じるようなもの、霊的体験と言うような感情で、神理解が置き換えられるのです。“神は愛である”や“キリストは仕えられるためではなく仕えるために来た”なども、同様に勝手に解釈されて来た典型に加えることが出来るでしょう。

しかし聖書が最も強調しているのは、神が歴史の中で、具体的な出来事により、あるいは特定の“ことば”によって示された御自身の啓示であって、決して漠然とした霊的体験というようなものではないのです。

6. 朗読の神学と典礼

マタ 1:1-17 使 13:13-41 ロマ 1:1-7

マタイ福音書は“イエス・キリストの誕生の次第”(1:18ff)を物語るに先立って、その冒頭でイエス・キリストの系図を提示しています。そこにはアブラハムから始まり、ダビデを経てマリアの夫ヨセフに至る救済史の展望の中で、神の子、救い主の到来による福音を宣教するという、新約聖書を貫いている神学が明確に表出されています(使 13:23、ロマ 1:2ff)。ちなみに、ルカ福音書では“イエスの系図”(3:23ff)は、ダビデおよびアブラハムを越えて天地創造にまで遡っています。

旧約聖書を読むと、イスラエルには非常に古い歴史を持つ春の祭り(過越祭と七週の祭)と秋の祭(仮庵祭)とがあって(申 16、レビ 23)、それらの祭りの中心主題は、神がイスラエルのために行われた大いなる救いを記念することであり、従ってその祭の中で神の御業の歴史がこの民の信仰宣言という形で朗読されました。旧約聖書の最初の六書は、この信仰宣言の主題を基礎として編集された文書であって、父祖たちの選び、エジプトの地からの解放、そして今住んでいる土地の取得という神の御業の大きな筋書きの周りに、各種の伝承素材が集められています。

このような神の民の礼拝における救済史的展望という性格を、初代教会と新約聖書が受け継いだということを、私たちは重く受け止めなければなりません。なぜならこのことが、キリスト教信仰と異教の信仰とを明確に区別したからです。それは旧約聖書を抜きにしては理解し得ないものであります。礼拝者はそこで神の救いの御業の歴史が語られるのを聞き、それをいわば現在における秘跡的再現として繰り返し体験するのです。ミサにおいてすべての会衆は司祭と共にその奉献に参加し、「わたしたちはいま、御子キリストの救いをもたらす受難・復活・昇天を記念し、その再臨を待ち望み、いのちに満ちたこのとうといけにえを感謝してささげます」と唱和します。

ところが実際には、すでに久しく通俗的なキリスト教が、救済史というものと無縁な、ただの道徳的、社会的、あるいは経済的な平和と安全を希求するだけの、異教的な宗教とその祭儀に成り下がってしまっているのです。

現代の教会の信者(司祭も信徒も共に)の多くは、“なぜミサにはことばの典礼と感謝の典礼があるのか”“なぜ朗読台で聖書が会衆に向かって読まれるのか”“なぜ聖書の基ついて説教が語られなければならないのか”“なぜ感謝の典礼にキリストの死と復活の記念が託されているのか”が分かっていない(カトリック教会にはあの素晴らしい教会憲章と典礼憲章が存在するにもかかわらず)のです。まるで理解していないのです。なぜ信者一人一人にとって、聖書に親しむことが大切なのでしょう。それは教会にとって“聖書神学”が、何にも勝って先ず“神の御業を救済史として信仰宣言する神学、すなわち朗読の神学”だからです。信者は毎主日のミサにおいて、救済史における神の御業の記録が信仰宣言的に朗読され説教されるのを聞き、いわば秘跡的に救済史の過去と現在および将来に参与するものではありませんか？

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」(ロマ 5:1f)

「それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」(ロマ 5:9)

7. 神の選び／(選ばれた)神の民

申 7:6-8

「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。……主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。」

申 26:5-10a

「わたしの先祖は、滅びゆくアラム人であり、……。わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、ここに持って参りました。」

聖書神学というものの最も基本的な前提として、今日だれもが当然知っていなければならないことがあります。それは、歴史は神の啓示の舞台であるという理解です。

教会では、古くから神学というものを“宗教上の教え”として、教科書風に組織的に説明するものだと考えて来ました。しかし近代の目覚ましい聖書神学の発展によって、教会の神学は“歴史の中での神の行為、およびその解釈”という新しい視点を与えられたのです。

先ず話を、旧約聖書から始めてみましょう。だれでもそれを読めばすぐに気付くように旧約聖書の記述は、“神があの出エジプトによって行われた救いの御業の説明”を一つの起点として論じられているのです。つまり、そこでの第一の基本的な神学的土台が、“神の民イスラエルの選び”であるということです。この神学的土台は、論理的哲学的に考え出された抽象的概念のようなものではなくて、それは歴史の解釈であり、イスラエルの信仰にとってはそれ以降のすべての歴史を解釈する絶対的な基礎でありました。

イスラエルの民は自らの存在の根拠を、「ただ、あなたに対する主の愛のゆえに」(申 7:8)ということ以外に決して考えることが出来ませんでした。事実“かたくなな民”(申 9:6)であったにもかかわらず、神の一方的な愛によって彼らは“主の聖なる民”とされたのであり、それはただ信仰によってのみ受け入れることの出来ることでありました。

「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」(申 6:4f)

この“あなたの神、主を愛する”とは、救済史を導かれる神の目的のためにという意味でありますから、人間が勝手に“自分の目に正しいと”(士 21:25)見える仕方で、神を愛したつもりになることとは、全く別な事柄なのです。

新約聖書に目を向けると、そこで述べられている使徒たちの宣教は、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハ 1:14)「神はキリストによって世を御自分と和解させ」(II コリ 5:19)「十字架につけられて死に、復活し、父である神の右の座に着き」(使徒信条)というキリストの出来事を起点として論じられています。そしてその基本的な神学的土台は“教会の選び”であって、救済史の将来は「神の(国の)栄光にあずかる希望」(ロマ 5:2)に基づいて、展望されているのです。

「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(使 1:11)「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに(復活の)勝利を賜る神に、感謝しよう」(I コリ 15:57)というのが、聖書神学全体の結論であります。

それでは、イエス・キリストの到来によって旧約の神の民イスラエルの選びは無効になったのでしょうか。教会の歴史の中では事実、過去にそのような理解があったのです。しかしそれは明らかに間違っていました。

「神は御自分の民を退けられたのであろうか。決してそうではない。」(ロマ 11:1)「神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。」(ロマ 11:29)「彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。……」(ロマ 9:4f)そして、福音の核心である「秘められた計画」が説明されているのです(エフェ 3:6)。「その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。このキリストを、わたしたち(教会)は宣べ伝えており、……」(コロ 1:27f)

8. 原始教会の旧約聖書解釈(1)

原始教会にとっての課題は単純に、イエス・キリストの誕生とその生涯、およびそして死と復活の意味を理解し、説明することでありました。そのために原始教会は、神がイエス・キリストにおいて何を意図し、何を実現され、さらにまた今後何をしようとしておられるのかを知る手掛かりを、旧約聖書から得ようとしてきました。この場合の材料は、イエス自身の教え、彼の行為の内容、それに伴って旧約聖書から引用された神のことは、そしてそれらの意味を教える聖霊の働きでありました。そのようなわけで、新約聖書には旧約聖書からのありとあらゆる引用や、それへの言及が溢れていて、その中には一見すると極端で不合理に見える解釈や、あるいは突飛なラビ的論法さえも含まれています。しかしこのようにして、原始教会はイエス・キリストの出来事を、神の贖いの御業の歴史における頂点として捉えたのです。

復活されたイエスはエマオ途上の弟子たちに現れて、「モーセとすべての預言者から始めて、(旧約)聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」(ルカ 24:27)と述べられています。原始教会の旧約聖書解釈は、このように復活のイエスから使徒たちが受けたものを起点とし、更にイエスがその後父のもとから遣わしてくださる聖霊によって教えられて(ヨハ 14:26)、使徒たちが理解したものであります。歴史の教会にとって聖書解釈とは今も、まさにこの主イエスとその弟子たちによる「旧約聖書解釈」を出発点とし、また帰着点とするものでなければなりません。イエス・キリストこそが(旧・新約)聖書の唯一の内容であり、このキリストが(旧・新約)聖書全体に統一を与えているからです。

ですから、単に一人の人物としてのイエスの宗教的体験とか、彼の人生の歩みとその教えの数々を学ぶということだけでは、聖書神学的な深い意味でのイエス像は描くことが出来ません。キリストはただの偉大な人物、偉大な殉教者、偉大な英雄ではありませんでした。原始教会が理解したキリストは、父の御心を行うために(ヨハ 6:38-40)、時が満ちて遣わされた方(ガラ 4:4)、そして十字架の死に至るまでの従順をささげ、このため、高く上げられた方(フィリ 2:6-11)でありました。ですから使徒たちの宣教の内容が、地上のイエスの単なる思い出話ではなくて、強調点はその再臨の待望にあったことが、このことから理解出来るのです。

当時の教会における旧約聖書解釈の仕方の代表的な典型は、予型論(typology)と呼ばれるものです(ロマ 5:14、1コリ 10:6 参照)。旧約聖書に書かれていることには、それぞれ元来の歴史的意味があるのだが、これを新しい信仰の目で見ると、同時に神がそれらを将来のもっと大きな出来事の予型として示しておられることが分かって来るという理解です。新約聖書の中から具体的に、いくつかの予型論の例を見て行きましょう。

まず、イエスの人格とその務めが、契約の民イスラエルにおける各種の務めを予型とし、これを実現するものとして理解されています。例えば 申 18:15-18 で、モーセは神が将来お立てになる預言者の務めについて述べていますが、新約聖書ではこの言葉が旧約の民の歴史を越えてイエスへの言及として理解されています(使 3:22f)。モーセや預言者たちの言葉と行為が、彼らの時代を超えてキリストを指し示すものとして、再解釈されました。福音書にある主の変容の物語り(マコ 9:2-8)では、預言者であるエリヤと律法の授与者であるモーセがイエスと語り合っているのを弟子たちは目撃しました。マタイ福音書が山上の説教(5-7章)で、イエスを新しい律法を与える第二のモーセとして描いているのも同じ理解からです。イエスはヨハネから洗礼を受けた後、イスラエルが荒れ野で試練の四十年間を過ごしたように、荒れ野で四十日の間悪魔から誘惑を受けられました。そしてモーセがイスラエルに語ったと申明記に書かれている言葉で、悪魔に返答されました。かつてモーセがエジプト王による男児虐殺からただ一人逃れたように(出 1:22-2:10)、イエスもヘロデ王によるベツレヘムの男児皆殺しをただ一人逃れました(マタ 2:13-18)。このイエスは、かつてのモーセや預言者たちのように神から与えられた能力によって数々の奇跡を行い、その復活によっては王またメシアとして、父なる神の右の座にお着きになりました。このようにして、かつてダビデ家の王たちの称号であり務めでもあった「神の子」「王」「諸国の支配者」(詩 2 編、110 編)等という呼び名が、復活されたキリストに移されました(マタ 28:18、黙 11:15、19:16)。キリストの贖いの御業は旧約聖書の類比によって説明され、過越の小羊として(1コリ 5:7)、あるいは雄山羊や雄牛の血によらず御自分の血によって、ただ一度天の聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた大祭司として(ヘブ 9:11f)、述べられています。このようにして、「キリストは新しい契約の仲介者」(ヘブ 9:15)、すべての人に永遠の命を得させる「第二のアダム」(ヨハ 3:16、1コリ 15:22)なのです。

9. 原始教会の旧約聖書解釈(2)

原始教会は、“神がイエスにおいて直接に、また決定的に行為したもうた”と宣教しました。イエスが地上を歩まれたときの宣教は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)であって、それは“神がまさに決定的に行為しようとしておられる”ということでしたが、主の復活の後の使徒たちの宣教は次の段階に進んでいたのです。初代教会で福音書が編集されたとき、そこに描かれたイエスの言葉とその御業は、弟子たちが主の復活後になって初めて、「後で分かるようになった」(ヨハ 13:7)ものでありました。

キリストの教会は古きイスラエルの共同体を原型として理解され、十二人の使徒たちは新しい世界でイスラエルの十二の部族を治める者と言われています(マタ 19:28)。教会は今や古きイスラエルの選びを共に相続する新しいイスラエル、アブラハムの子孫です(ロマ 4 章、ガラ 3:26-29、エフェ 2:11～3:6)。教会にはキリストの血による新しい契約が与えられ(ルカ 22:20、1コリ 11:25)、かつての過越の食事を原型とする感謝の祭儀が主日毎に祝われるようになりました。

出エジプトと荒れ野の旅、そして嗣業の土地取得の物語りは、旧約聖書におけるのと同様に新約聖書においても重要な救済史の枠であります。イエス・キリストにおいて新しい出エジプトと新しい嗣業とが教会に与えられたからです。神がキリストを通して実現された救いの御業を表現する主要な語句が、出エジプト関連の物語りから採用されました。“贖う”“贖いの業”“選び出す”“奴隷の家から導き出す”“救い出す”“いけにえ”“主の聖なる民”などです。例えば使徒パウロが教会の救いを次のように表現するとき、その枠は出エジプトの物語りでありました。「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」(コロ 1:13f) この教会が目指している神の国は、「光の中にある聖なる者たちの相続分(嗣業の地)」(コロ 1:12)に他なりません。同様にヨハネ福音書の第 6 章で、イエスはこの出エジプトの物語りの枠を使って、エジプト脱出と荒れ野の旅を記念するユダヤ人の祭である過越祭(6:4)と、御自分が教会に託された感謝の祭儀との違いを説明しておられます(6:47-51)。

このような原始教会の旧約聖書解釈は、そこから系統的な原理あるいは教理のシステムを見つけ出し、それを福音理解に適用するようなものではありませんでした。以上に見て来た予型論(typology)と呼ばれるものも、厳密な論理であるよりはむしろ信仰に基づく、救済史に対する解釈の姿勢のようなものであります。すなわち、神は御自分の御心に従って救済史を導いておられるという信仰、キリストにおいて古きイスラエルの歴史は完成に到達し(ロマ 10:4、11コリ 1:20)、今や新しい時代が始まったという確信なのです(11コリ 5:17)。「キリスト・イエスに結ばれる」(ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ ロマ 6:3)とは、今すでに始まっている神の国の子とされているということであり(ロマ 8:9-17)、それは御子が再び来られる終末の日には「新しい天と新しい地」(黙 21:1)となって現れるのです(フィリ 3:20f、1ヨハ 3:2)。

しかし一つだけ、ここで警告しておかなければなりません。予型論というのは、いわばその特殊な時代に原始教会が用いた聖書解釈法であって、現代の我々がそれに倣って、使徒たちの宣教(新約聖書)をさらに越えて新しく進めて行ってよいような方法論ではないということです。復活のイエスから使徒たちが受けたものを起点とし(ルカ 24:27、使 1:3)、更にイエスがその後も父のもとから遣わして下さる聖霊によって教えられて(ヨハ 14:26)使徒たちが理解した解釈を、使徒パウロは「イエス・キリストの啓示によって知らされた」(ガラ 1:12)と表現しました。現代の教会にとっての聖書解釈の課題は、この使徒たちに与えられた啓示を越えてさらに新しい何かを発見するようなものではないのです。ローマ・カトリック教会はこのことを、第二バチカン公会議の公文書において明確に説明しています。

「ただし、彼ら(ローマ教皇と司教たち)は信仰の神的遺産に属するような新たな公の啓示を受けることはない。」(教会憲章 25)

「われわれの主イエス・キリストの栄えある再臨までは、もはやいかなる新しい公的啓示も期待すべきではない。」(啓示憲章 4)

10. 原始教会の宣教

原始教会において最も古い信仰告白形式と考えられるものに、「イエス・キリストは主である」(フィリ2:11)と「イエスは神の子である」(1ヨハ4:15)があります。もちろん新約聖書に記録されている以外にも、他にいろいろな告白形式があったに違いありません。いずれにしてもそれらは、個人の内面的・神秘的宗教感情を述べたり、一連の霊的・道徳的な教えを並べたり、ましてや教理的なシステムを定義するようなものではなくて、受肉された神の子イエスの生涯と死、およびその復活を通して行われた御業を、信仰宣言するものであります。

これらの信仰告白の内容は当然、原始教会によって宣教された福音から生まれたものです。今から80年ほど前の有名なロンドンでの講演(使徒的宣教とその展開)でC.H.ドッドは、使徒パウロの手紙および使徒言行録の最初の13章の中にある使徒たちの説教に基づいて、原始教会における福音宣教(kerygma)の主要点を抽出して、これをエルサレム・ケリュグマと名付けました。それには少なくとも次のような諸項目が含まれていました。(1) 預言者たちの口を通して告げられていたことが実現し、新しい時代がキリストの来臨と共に始まった。(2) 神はこれをイエスの生涯と死、および復活によって成し遂げられた。メシアとされたこと(使2:36)、預言者としての務め(使3:22)、その死と復活は、すべて聖書に書いてあるとおり(1コリ15:3)に起こったことであった。(3) その復活を通して、神はイエスを新しいイスラエルのメシア的支配者として、御自身の右の座に着かせた。(4) 教会の現在の姿は、聖霊が注がれていること(使2:16)と、キリストの支配が始まっていることによるのである。(5) メシア時代はキリストの再臨により、間もなくその完成に達するだろう。(6) 最後にケリュグマはいつも、悔い改めの勧め、罪の赦しと聖霊の賜物、そして選民の集団に入る人に対する救いの約束、すなわち来るべき世の命への約束をもって結ばれている。

このように原始教会の宣教は、起こった出来事の理解に基づく客観的な、そして全く信仰告白的なものであります。その出来事とはイエス・キリストの死と復活であり、その到来によって救済史における神の御業が頂点に達し、現実となったのです。今や教会は主なるキリストの支配下において、最終的な勝利はその再臨において完成するのです。教会に伝えられて来た福音書は、このような原始教会のケリュグマの周りに各種の伝承が集められて出来たものであって、その逆ではありませんでした。ですから、それはイエスの回顧録でも、伝記でもなくて、受肉されたイエスの生涯と死を通して神が行われた御業を、その伝承の原始教会における解釈と共に、信仰告白的に朗誦する独特の文学類型、すなわち“福音書”なのです。

それに対して、新約聖書の中で“手紙”と名付けられているものは、外部の世界に対してではなくて、すでに救いに入れられた人々の群である諸教会に宛てて書かれた文書であって、原始教会が“教え”と呼んだ性格のものであります。ケリュグマを前提にしてはいても、それを宣教することよりもむしろ弁護することに、信者が福音に生きることを助けるための教えを説くことに重点が置かれています。言うまでもなく、当時の教会が改宗者を得たのは、“教え”によってではなく、“宣教”によってでありました(1コリ1:21)。

新約聖書では、旧約の詩編や預言書からも多く引用されていますが、キリストにおける神の御業の背景として最も頻りに言及されているのは、救済史の中でのアブラハムから始めてダビデに至る物語りの部分です。エルサレム・ケリュグマは、恐らくこの部分がイエスの死と復活の背景として、エルサレムとユダの悲劇およびバビロン捕囚、そこからのイスラエルの帰還という物語りよりも、本質的に重要であると理解したのです。このような原始教会の宣教の概観を、私たちは使徒パウロのピシディア州のアンティオキアにおける説教で見ることが出来ます(使13:16ff)。先ずw.17-23で救済史的告白が明示され、その上でケリュグマの内容が順に説明されて行きます。ここで取り上げられている救済史的背景は、父祖たちから始めてダビデに至るもので、そこから直ちに救い主イエスへと説教が展開します。つまり救済史の中で、アブラハムから始まりダビデに至る部分が最も重要なものであって、キリストはそこで示された神の救いの計画を受け継ぎ完成する方なのです。